さんけん新聞

発　行
ＮＰＯ法人
三段峡―太田川
流域研究会
（代表・本宮炎）

〒731－3813
広島県山県郡
安芸太田町
柴木 1734
☎090・
3421・3046

名勝指定 100 周年事業

三段峡の魅力・価値を発信

「魚類とヤマセミ」「歴史と文化」講演会開く

今年秋、三段峡が名勝指定百周年を迎えるのを記念して二つの講演会が十二月七日と八日の両日、ＬＯＵＰＥで開かれた。さんけんは百周年を三段峡の魅力や価値を発信する契機と位置付け、様々なイベントや企画を実施していく。

三十三人が聴講した七日の「太田川の魚類とヤマセミの現状」では、水生生物の専門家、内藤順一さんが太田川に生息する魚類を紹介し、外来種や遺伝的多様性を解説した。放流による交雑、水路の改修によって激減する魚種など環境の変化による影響を指摘した。

野鳥や野生生物の保護に詳しく、ヤマセミの人工巣穴を設置している上野吉雄さんは、ヤマセミの減少を示す、広島県のレッドデータブック（絶滅の恐れのある野生生物）でのランクの悪化、巣穴の適地となる崖の減少など生息環境の現状を説明した。

ヤマセミの現状を説明する上野さん（右から二人目）

十四人が聴講した八日の「三段峡の歴史と文化」は、さんけん新聞連載中の「セピア寫眞帖」の筆者、松尾俊孝副理事長が、熊南峰や斎藤露翠の熱意で名勝指定された経緯や指定二年後の「日本新八景」への大量投票など当時の住民意識の高まりを説明。江戸期の文人趣味や山水画などの文化的背景から「三段峡の見方」を解説し、現在とは違った三段峡の価値を紹介した。

2025 年の主な事業計画

名勝100周年事業推進

10 月の名勝指定 100 周年に向け、三段峡の文化史、自然史講座を開催。三段峡に関わる専門家やさんけん理事による企画を実施する。イワナの保全映画の上映会や丸木位里展などを企画する。

LOUPE の運営を強化

定休日を水・木曜日に固定して、4 月から 12 月上旬まで、カフェと LOUPE の営業を定着させた。入口の改装や展示内容を見直し、より魅力ある施設にして、来店者の増加と売り上げ増を目指す。

外国人客への態勢構築

3 月から広島県観光連盟の支援によるインバウンド向けツアーが販売される。三段峡でも外国人観光客は増加傾向にあり、LOUPE での営業やツアー実施の際の受け入れ態勢を構築していく。

テーマ「結実」　環境保全や人材育成で成長

本宮炎理事長「事業の自立 組織の継続性確立」

本宮炎理事長

今年のテーマは「結実」。干支の巳は「胎児の象形」から成り立ち、胎児や種子を意味すると言われる。さんけんのこれまでの取り組みや人とのつながりから、新たな種を生み出すと言う思いも込めた。

今年は名勝指定百周年。さんけんはプレイベントとして昨年、講演会を三回開き、今年も計画している。三段峡の自然や文化的側面を掘り進めた成果の結実と言える。

その「実」は環境保全や人材育成で成長し、今は事業性の高いＬＯＵＰＥやツアー運営になっている。百周年を節目に事業の自立と組織の継続性を確立したい。

一口メモ

▼驚異的

三段峡は今年、名勝指定されて百周年を迎える。指定された一九二五年は、熊南峰が初入峡した一七年から八年目である。この間、斎藤露翠との出会いを機に、三段峡を世に広めるために尽力した。さんけんは二〇一六年の設立から八年が経過した。同様の年月で南峰らが成し遂げた業績は驚異的だ。原点を忘れず、百年後の三段峡に寄与できればと思う。

広島大学公開講演会

種減少の現状学ぶ

生物多様性の減少をテーマにした広島大学総合博物館の公開講座が十二月二十一日、同館で開かれ、本宮宏美事務局長と佐藤亜紗さんが参加した。司会は広大さんけん部顧問の黒島健介さん。基調講演では六度目の大絶滅と言われる種減少の現状の報告があり、世羅地域や地元高校生の保全活動が紹介された。

2月22日　イワナの映画と講演会

イワナの現状と保全を訴えるドキュメンタリー映画「ミルクの中のイワナ」の上映会と河合幸一郎広島大学名誉教授の講演会が 2 月 22 日、広島市中区のパタゴニア広島で開かれる。上映会は井上嵩裕隊員が 1 年以上かけて坂本麻人監督と協議した。講演会は 17 時（無料）、上映会は 19 時 30 分（1500 円）。
▽問い合わせ先：090-1244-4296（井上）

三台目の人工巣穴

軽量・耐久性を向上

サントリー世界愛鳥基金の助成を受けたヤマセミの人工巣穴を十二月二十三日と二十四日の両日、さんけん会員の上野吉雄さんと戸河内本郷の河野良久さん、ヤマセミ部員の二人が製作した。軽量化し、耐久性を向上させて、より自然の巣穴に近い形状にした。二月までに安芸太田町内に設置する予定。二〇二三年度からの助成事業で三台目。

セピア寫眞帖（26）

笑顔晴れやか 年賀状配達へ出発

一九五一年元旦に撮影された、年賀状を配達する出発時の様子である。背後の看板に「上殿郵」の文字がわずかに見える。写真は戸河内町と上殿村が五六年に合併してから三十周年になるのを記念して、同町が八六年に発行した「とごうち写真で見るあゆみ」に掲載されている。

三段峡周辺の郵便事業は一八八二年、戸河内村下本郷に郵便取扱所が設置されたのが最初で、上殿村は一九二九年だった。当時は無集配局で郵便物の配達に大変時間がかかったようだ。

戦後、念願の集配局になった。写真は数年経っているのでそのためとも思えないが、配達員一同の笑顔が実に晴れやかだ。

興味深い郵便差出数のデータがある。二六年と二八年が、ともに三十三万通前後なのに対し、間の二七年は五四万六二三六通と二十万通も急増している。理由は簡単で、この年四月から五月に開催された「日本新八景」の一次審査で、地元民が総出で三段峡に投票したためである。（松尾俊孝）